2022年5月29日　説教「忠実な賢いしもべ」

マタイの福音書24章45~51節

マタイ24章における、イエス・キリストの終わりの日について教えのまとめ部分です。学んでいきましょう。

１．たとえ話（45）

①家のしもべたち（45）**「主人から、その家のしもべたちを任されて、」**ここまで終わりわり日のことが語られてきて、急に調子が変わってしまったような印象があるかもしれません。しかし、イエスは終わりの日についての主題の一環として、あるいは結論として、この箇所を述べておられるのです。ここでもたとえが用いられています。つまり、主人から務めを与えられて一定の責任を与えられた人のことです。彼の主人は用があって、外に出ることになっているのです。少なくてもその間は、相当のことを任されたことになりました。

②食事を与え（45）**「食事時には彼らに食事をきちんと与えるような」**主人から仕事を任された人の責任内容は、家のしもべたちに食事を与えることでした。それも、食事時とありますから、決まった時間に食事を用意する必要があったのです。　新約聖書の時代に食事は一日に三度であったようです。その家に何人のしもべたちがいたかは不明ですが、彼らに食事をきちんと与えることが彼の務めでした。

③忠実な賢いしもべ（45）**「忠実な賢いしもべとは、いったいだれでしょう。」**食事時に間違いなく、食事を出すしもべというが忠実なしもべということは理解しやすいところでしょう。ここでは加えて、こうしたしもべの賢さが言われています。どの部分でしょうか。ここでの賢さは、人が見ているかいないかにかかわらず、主人に任されたことを確実に果たすことが、良い結果をもたらすという見通しを持つ賢さを見ていると考えられます。実を言うと、このことについては25章の二つのたとえ話において、さらに鮮明にそのことが示されていくのです。

　これは、たとえ話です。この時の主人とはイエス・キリストのことでしょう。キリストは私たちのために十字架で身代わりになって死んでくださいました。また、三日目に復活されて弟子たちや人々に、40 日間現れてくださいました。その後、キリストは天に昇られました。このたとえを話された時点は十字架刑の直前ですから、キリストは弟子たちに宣教の務めを与えられたとも考えられますし、このたとえ話に触れるすべての人々に、忠実な賢いしもべを意識させておられるとも理解できます。

２．幸いなしもべ（46～47節）

①帰る主人（46）**「主人が帰って来たときに、」**さて、たとえ話は次のステージに入ります。つまり、外に出ていた主人が帰って来るのです。これは、キリストが再臨されるということを意味していると考えら

れます。つまり、学んできたように、終わりの日が来ると、天に昇っておられたキリストがもう一度、やって来られるということです。

②幸いなしもべ（46）**「そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。」**主人が帰ってきたときに、「そのようにしているのを見られる」というのは、主人から命ぜられたことを忠実に行っていると見られるということです。主人は前触れなしに帰って来たわけですから、その時にも約束したことを果たしていると評価される人は幸いだというのです。つまり、このしもべは人が見ているから行うというのではなく、ただ主人との約束を守るということを大切にしていたのです。再臨の主が来られた時に、その人がキリストへの信仰を第一にし、キリストの教えに導かれて歩んでいると認められる人は幸いだということでしょう。

③財産をまかせ（47）**「まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。」**まことに（元の言葉はアーメン）、あなたがたに告げますよ。その主人は自分の全財産をそのしもべに任せるようになるというのです。25 章 14 節以下のたとえ話では、タラントを用いてそれを増やすというたとえ話がありますが、同じ方向のことが言われていると言えましょう。再臨のキリストは、忠実な賢いしもべに対して、御自身の大切なものを委ねてくださるということでありましょう。

３．神を侮るしもべ（48～51 節）

①悪いしもべ（48～49）**「ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい』と心の中で思い、その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりしていると、」**一方、悪いしもべは、「主人はまだが帰るまい」と高を括り、仲間に暴力を振るったり、欲望のままに飲食したり騒いだりしているというのです。主であるキリストをないがしろにし、自己中心で肉に支配されて歩む者たちのことでしょうが、他人事ではないでしょう。かたちを変えて、私達のうちにそうしたものが潜んでいます。

②思いがけない日（50）**「そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰ってきます。」**しかし、人間の浅はかな考えとは違ったことが起きるのです。なんとすぐには帰ってくるはずがないと思っていた主人が、思いがけなくも帰ってくるのです。これは、キリストによって言われてきたように、たくさんの前兆の後にキリストは再臨されるのです。そんなことは起きるはずもないと、人々が思っていたとしても、不意を突くようにして、キリストは来られるのです。

③厳しい罰（51）**「そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」**主人をないがしろにしていたしもべは厳しく罰せられ、偽善者たちに対する戒めと同じように、さばかれるというのです。審きを受けることとなる者たちは、泣いて歯ぎしりをします。25 章のたとえ話の中にも、『役に立たないしもべは、外の暗闇に追い出され、泣いて歯ぎしりをするとあり、同じ表現がされています。神を侮り、その御言葉を信じない者たちへの、お取り扱いは厳しいのです。

《結論》

1974 年の 10 月 19 日からマタイの福音書を一日一章ずつ読み始めました。ノートにつけながら、読み進みました。当時、私は宇都宮にあって大学宣教に加わっていたのです。週 4 日はセールスマンとして働き、3 日を宣教に従事しました。聖書を開くことは楽しみで、歩きながら祈ることも喜びでした。充実したクリスチャン生活を味わっていました。まだ自分の生涯の仕事は何かについて、御心がわかっていませんでしたから、主の導きをいただきたいと願いながら、み言葉と相対していました。そして 12 月 4 日となって、24 章にたどり着いたのです。その時は口語訳聖書で読んでいたのですが、今朝読んだ箇所の中の「忠実な思慮深い僕」という言葉と出会い、主の教えられるこのようなクリスチャンにさせていただきたいと願わされたことでした。どのような立場をとるかは別にして、そのような姿勢をいただいていきたいと思ったのです。もっとも、そこにはいささか読み込みも入っていて、「忠実さ」も「思慮深さ」も、律法的にそのような人格を目指すといった面もありました。人がより強く意識されていたように思います。

今朝、改めてこの聖書箇所から「忠実な賢いしもべ」について考えさせられました。結論を先にいえば、これは第一義的には、終わりの日を念頭に置きながら、主が教えられたことですから、その視点からこの言葉も見なくてはならないのです。つまり、終わりの日にはキリストが再臨されるということを意識して心備えをして歩むなかに、人に気遣うのではなく、主なる神に心を向け、主に忠実であること、主の前に賢くあることが教えられているのです。となれば、求められていることは、人に喜ばれることよりも、主に喜ばれることです。人との関係以上に、主なる神との関係を深めていくことに心を注いでいくことが肝要なのです。主の前に忠実な者は、主を礼拝します。主を賛美します。主に祈ります。主の御言葉を学びます。

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべてすべて与えられます。だから、明日のための心配は無用です。明日のことは明日が心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」（マタイ 6：33～34）とあるように、人間世界のなかに生きる私達ですから、いろいろな思

い煩いも持ちやすいのです。そんな者たちにとって求める相手は、まずもって主なる神であるのです。そこにこそ、霊的な賢さも備えられるのです。人間的な小賢しさではなく、神が賜る思慮深さです。それは、備えられていくものです。忠実さも、賢さも、もぎ取るようにではなく、与えられていくということなのです。

もちろん、適用の部分に入ってくれば、人との関わりにおいての忠実さや賢さも必要であります。でもその根本には、神の恵みをいただいていく姿勢を忘れないようにいたしましょう。また、終わりの日をいつも見据えていくときに、ここで言われることが全うされていくのです。

改めて、主の忠実な賢いしもべとして歩んでいくための信仰をいただいていきたいものです。主が与えられる祝福がありますように。